

御幸町だより

No.152 2024年3月31日

京都御幸町教会

〒604-0933

京都市中京区御幸町二条下る
山本町434

TEL・FAX (075) 231-3441

『希望とは』

(ロマ 5:1~5)

牧師 村島 義也

ある人の体験録です。彼曰く「四十に一つ足りない鞭を受けたことが五度、鞭で打たれたことが三度、石を投げつけられたことが一度、投獄されたことも度々。しばしば旅をしたが、盗賊や嵐や迫害やと、旅には災難がついてまわり、因みに難船したことはこれまでに三度、一昼夜海上に漂ったこともあった。また、苦勞し、骨折って、しばしば眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食わずにおり、寒さに凍え、裸でいたこともあった。この他にもまだあるが、その上に…」と続く。苦勞の絶えない人だ。せめて体はよほど頑丈であったかと思えば、「とげ」と呼ぶような持病があった、と。(何か悪いものでも憑いているのでは？ お払いでもしてもらった方がいいのでは？)。

しかし、この災難続きの病気持ちである彼こそは、「今や、恵み時、今こそ、救いの日」と言って、万物の源であり創造者である神ご自身が、人を汚れと滅びから救うための特別な手段を講じて下さったという福音を、他の誰にも勝って多くの人に届けた人なのであって、使徒パウロその人です。(上記につきⅡコリント 11:23b~33、同 12:7b~10 参照)。

パウロは言います、「わたしたちは信仰によって義とされ、キリストによって神との間に平和を得ており、キリストのお陰で、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています」。「神との間に平和を得ている」、厄払いと言ってこれ以上の良きことがあるでしょうか。「義とされる」は「神によしとされる(肯定される)」ということであり、天地創造の日々に「神はこれを見て、良しとされた」(創世記 1 章)とありますが、独り子による赦しと贖いによって私たちがあの祝福に満ちた造り主の眼差しの下に捉え直されたことを意味します。これ以上の良きことがありますでしょうか。私たちはキリストの恵みにより、神との間に平和を得ており、やがて永遠の命に至るなにもものにも否定されぬ大い

なる肯定を、今生あることの現実、将来についての前提とされているのです。

「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。私たちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。」(3~4 節)、この言葉のみ切り取れば、何か精神論的なというか、体育会系のスローガンのように聞こえなくもないですが、パウロが「生む(生まれる)」と表現していることが大切です。一つの出来事はそれ自体でしかないが、そこにどんな意味が生まれるか。「生む(生まれる)」は、すべては、我々をキリストにおいて良しとして下さる創造主の育みの下にあることを表しています。「苦難をも誇り」とするパウロは、一連の言葉をもって希望は希望に繋がっていることを示します。そして言うのです、「希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」(5 節)。

では「希望とは何か」。希望についてパウロはこのようにも言っています、「見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。」(ロマ 8:24~25)。では、そのような「希望とは何か」。良い言葉があります。「希望とは、物事がうまくいくという確信ではない。うまくいってもいかなくても、物事には意味があると確信しているということである」(ヴァーツラフ・ハヴェル)。私たちは信仰によって義とされ(神に良しとされ)、御復活の主イエス・キリストのお陰で、神の栄光にあずかる希望を与えられています。実に私たちの神は「死人を生かし、無から有を呼び出される神」(ロマ 4:17 口語訳)なのです。うまくいってもいかなくても、物事には意味がある、希望は生まれると信じて生きて行きましょう。